『奈良大学総合研究所所報』の発刊にあたって

学長　水津一朗

奈良大学総合研究所は、平成２年４月、本学の研究・教育の拡充、とりわけ学際領域の開発や市民社会との連帯をめざして発足した。開所３ヵ年目にして、研究所の諸事業に関する記録を収めた『奈良大学総合研究所所報』を創刊し、内外の関係機関はもちろん、現代の社会的要請に対して、いささかの貢献を期す。

附属図書館の一室でささやかに開所した研究所だったが、全学の協力のもとに初年度から、個人・共同研究プロジェクトと公開講座を主軸として、着実に成果をたくわえてきた。２年度からは『奈良大学紀要』の編集を担当する以外に、外部機関からの研究助成金の事務処理をも取扱う。

ところで個人研究プロジェクトは、各年次の「奈良大学特別研究費」による諸研究を包括する。共同研究プロジェクトは、元来学部単位に組織された、大和盆地に関する人文・社会調査の２チームを再編成・拡充したもの。その拡充にさいしては、学部間の研究交流と研究対象の本学にふさわしい個性化とにとくに留意された。例えば、「大和を中心とする信仰と芸能に関する歴史的研究」は、本学主催「伝統芸能フェスティバル」（奈良県芸術祭参加）の学術的側面の深化を志向し、古都の大学らしい学際活動に新分野をひらくものである。

一方、公開講座は、「文化講座」と「社会学部公開講座」のほかに、今年度から「教養講座」を加えた。いずれもコミューニティカレッジの性格をもち、部分的には研究プロジェクトの研究成果の発表をも含む。とくに「教養講座」は特定行政機関の生涯教育事業とも共催の形をとり、今後の社会人教育の一方向を探る実験的試みでもある。したがって、研究プロジェクト「生涯学習社会における高等教育機関の役割と課題に関する実証的研究」とも、意図的に実行スタフの重複がはかられた。

なお研究所は、平成５年度から新築の総合研究棟内に移り、整備された空間と設備のもとで想を新たに再発足する。草創期における研究所事業の充実については、所長土田英雄教授を中心とする研究所運営委員会委員と事務当局の労によるところが大きい。